

テキスト論研究プロジェクト

## 「世界の視点」

栗原 隆

テキストを読む際には読み方がある。今日ならリテラシーとでも言うのかもしれないが、その「読み方」自体が大きな問題を含んでいる。西欧の思想を研究している私たちの場合、まず、原語で読んでこれを理解することが必要になる。その過程には、翻訳して母語で理解するという高度に知的な営みの介在することが圧倒的に多い。翻訳する場合、ほんの一語の取り違いで、意味の全く通じない場合のあることも事実である。日本語そのものが意味のとりにくい文章になってしまつては、翻訳の用をなさない場合さえある。

私たちはいったい何を翻訳するのであろうか。原典の文章を翻訳するわけだが、その際に目指すものは、ただ原文を分かりやすい日本語に翻訳することではない。原文に織り込まれている思想を読み解くために、私たちは翻訳をする。そして理解しようとする対象は、単なる言葉尻ではない。あくまで原典に流れている思想や理念、精神といったものである。

拙論の「精神と文字」は、解釈学の草創期においてカントの言葉をめぐって、カント哲学の正嫡は誰かという問題について繰り広げられた論争から、解釈学の根本的な問題設定が自覚されたことを論じている。こうした言葉の解釈をめぐる問題は日常にあって珍しいことではなく、しばしば見られることである。

たとえば、何か提案をしたときに、かなりの決定権を持つている人から、「うーん、難しいなあ」と言われた場合である。どう解釈するべきか、提案者は考えることであろう。その提案は、実行に移されたところで客観的に成功する可能性がないと判断されたのかもしれないし、単にその提案には支持が集まる見込みがないと情勢判断されたのかもしれない。さらには、単にその提案に対する好き嫌いの表明かもしれないし、自分は関わりたくないとの意思表示かもしれない。解釈する際には、単に言葉の理解だけでは済まない。理解の対象が言葉だけでないなら、何を理解しなくてはならないのか。相手の考えや思惑であり、そうした判断を下さざるを得なかった状況全体の空気や脈絡である。

相手にしているテキストの著者を理解するには、これまでの著作や影響関係、人脈的な繋がりや言葉遣い、そして生活ぶりなどに到るまで、私たちは考慮に入れておかなくてはならない。とりわけ、著述において他の文献が引用されている場合、引用されている文献にもあたり、引用された箇所解釈の適否を検証しておくかないと、思わぬ落とし穴のあることもある。歪曲したり、当面の論述に都合がいいように引用がなされている場合もしばしばだからである。しかし、そうした強引さの現われている箇所を見つけることが出来たなら、著者の意図を推し量ることは逆に易しい。原著者のほかの著作との不整合が際立つこともある。その場合にも、どうしてそのように整合性のない、あるいは矛盾するように思われることを書かざるを得なかったのかを探究するならば、著者の知られざる、やむにやまれぬ事情が明らかになることもある。そうならば、解釈者は、著作そのものから著者その人への理解に達することになる。すなわち、著作の文字に留まらず、原著者の生へ、解釈者は透徹しなくてはならない。

著作の個別的な部分から著作全体や、著者その人の理解に到る最初の出発点は、解釈者の眼差しである。その著作をどのように読むべきか、読み進めてゆく眼差しである。全体は個別から読み進められるとともに、個

別は全体から裏付けされる。個別と全体の往還において理解が進むわけである。著作から著者を知ることができると同時に、著者を知ってこそ初めて、著作の解釈が裏打ちされる。著作の読解と著者の理解の往還において、解釈が成り立つ。その時に重要なのは、解釈者の視点である。著作の中のある箇所の論述にと、それを著者の生に鑑みて、必然的な論述であったと解釈する眼差しである。

古典の場合、その時代にあつてはいかなる生が育まれていたかを理解することは、著作を読み進める前提になる。勿論、テキストの叙述として、その時代がいかなる時代であり、どうであつたかが明言されている場合もある。その場合には、テキストと時代との循環の上に理解が成り立つことになる。そうでない場合、私たちはその時代を知ることを読解とともに進めなくてはならない。それならば、歴史書を紐解くことが必要になるのであろうか。

必ずしもそうだとは言えないのも事実である。なぜなら、テキストそのものから時代の空気を読み取ることのできるからである。その著作は、あくまでもその時代に生まれたものであり、時代の雰囲気の中で醸成されたものである。著者もその時代に生を育んでいた。著作が語る思想、著作に貫かれている理念、著作に立ちこめる精神を理解して、著者に漂う気分を置き換えて自らの時代を考えるなら、その原著者に織り成された影響関係や、その著者のほかの著作とを考えあわせる中で、解釈者自身が生きている時代とそれに対する解釈者自身の構えが反映された形で、原著者自身の時代における生が紡ぎだされることになる。確かにそれは、一つの物語かもしれないが、解釈者自身の確固たる眼差しのもとに映現された著作と著者と時代とのトリアードである。そしてこれが原著者の生きた世界なのである。

私たち、テキスト論研究のプロジェクト、「世界の視点」が、こうした学的反省の上に立って、西洋思想史の隠された水脈を発掘し、説明することを通してオルタナティブな思想の境域を際立たせようとしているのは、

従来の思想史研究を書き替える意義がそこにあるからなのもとより、「現在」に生きる私たちが選び得る理路の可能性を広げることができるところでもある。こうした共通了解のもと私たちは、思想史の表舞台に登場しな  
いまままで終わったテキストの解明について、テキスト論的な方法論を自覚しながら、世界を紡ぎだす視点をも  
ちながら続けている。